上田庄三郎による子どもの個の発見と教育のユートピア

— 雲雀ヶ岡学園の夢とその挫折 —

学校教育開発学コース　浅　井　幸　子

Educational Utopia and the Discovery of Children as Individuals by Shozaburo Ueda
— In Hibarigaoka-Gakuen Primary School —

Sachiko ASAI

This paper describes an educational utopia dreamed by Shozaburo Ueda (1894−1958) at a private experimental school, "Hibarigaoka-Gakuen"(1925.9−1927.11) established in a new suburb of Chigasaki Town. In tracing his educational approach, the following three are pointed out: First, Ueda planned Hibarigaoka-Gakuen depending on his idealization of children as "Sojin", the term which meant an individual who was free from social system and pursued value of life itself. He regarded the school as a place at where children acted freely and teacher protected them. Second, Ueda's idealization of children was a central cannon of his education as well as, paradoxically, a destructive conception of it. On the one hand, his first person narrative in educational journals displayed children's daily learning activities in the school, which represented his receptive look at children and his reflection on possibility of education in small events. On the other hand, his inquiries for "Education of Sojin" on public media became negative to capitalistic culture and bourgeois lives, which did not affirm childrens' lives unconditionally. Ueda resinged from his teaching job without solving this contradiction. Third, when Ueda was an educational journalist after retirement, he ceased to place his hope on children as perfect individuals and criticized educational theory in his articles. As he wrote articles without talking about children, he lost his educational utopia.

目　　次

はじめに
Ⅰ　「雲雀ヶ岡児童の村」の夢
　A　教育のユートピアの構想
　　1　闘う個の主張
　　2　子どもの個の発見
　B　別荘地の学校
Ⅱ　雲雀ヶ岡学園における教育の語り
　A　『教育の世紀』の教育言説
　B　『教育日録』の日常世界
Ⅲ　教育のユートピアの挫折
　A　雲雀ヶ岡学園の閉校
　B　子どもの喪失と清算の語り
おわりに

はじめに

上田庄三郎（1894-1958）は茅ヶ崎の別荘地の私立雲雀ヶ岡学園（1925.9-1927.11）[1]を，個としての子どもが自由に活動する教育のユートピアとして構想し展開した。その教育の特徴を構成する主な要素は3つある。まず第1は，上田の個の主張が内包していたアナキズムである。彼は闘いの奨励と皮肉に満ちた戦闘的な語り口の使用を通して因習や制度への回収を拒む個を表現し，教育において生の享受を目的とする生の革命を志向していた。第2に，理想的な個の子どもにおける発見と礼賛である。上田は，子どもに「素人（そじん）」と表現される生を謳歌する個を見出し，教師の仕事をその擁護に求めていた。そして第3に，固有名の子どもの日常を描出する上田の教育日誌である。『雲雀ヶ岡学園教育日録』[2]には，子ど

もが名前や愛称で表記され，彼らが絵を描いたことや童謡を創ったこと，喧嘩したことなどが上田の素朴な感想を添えて記されていた。

本論文は，上田による子どもの表象とその変容に着目して，雲雀ヶ岡学園における教育の構想，展開，挫折の過程を描出したい。上田は1914年に高知県師範を卒業して小学校教師となり，新教育の影響を受けつつ，秩序や制度の批判を通して個の自由を主張していた。その過程で彼は，個の理想的な在り様を子どもに発見する。彼が教育の世紀社からの招聘を受けて1925年９月に赴任した雲雀ヶ岡学園では，子どもの生の無条件の肯定を基盤とする教育が企図された。彼は『教育の世紀』誌において，「素人」として理想化された制度を逃れる剝き出しの個と，「素人」としての子どもを礼賛しつつ，自らの教育論を展開している。同時に『教育日録』では，子どもの日常的な姿を描き出していた。1927年11月に，彼は経営の破綻した雲雀ヶ岡学園を辞し，上京して教育ジャーナリストとなる。教育に「階級」の視点を導入した彼の論考には，「素人」としての子どもに代わり，社会批判を行う子どもが登場していた。しかしその後，彼はあまり子どもを語らなくなり，「マルクス主義」や国民学校体制に教育改革の希望を託しながら，既存の教育の制度や理論の批判を中心とする論考を発表した。

雲雀ヶ岡学園については，先行研究が諸事実の解明をすすめている。川口幸宏の「上田庄三郎と雲雀ヶ岡小学校」[3]（1980）は，丹念な文献調査を行い，雲雀ヶ岡学園の実践を「公教育体制のなかでがんじがらめにされている児童や教師を解放し，かつ創意工夫のある，『生きる力』のための教育活動であった」と評価している。中野新之祐の「茅ヶ崎・雲雀ヶ岡［児童の村］小学校」[4]（1984）は，生徒と親への聞き取り調査を行い，雲雀ヶ岡の別荘地開発の展開や生徒の家庭の状況を明らかにした。この２つの研究は，川口が雲雀ヶ岡学園の実践を「生活教育」と呼び，中野が後の上田による雲雀ヶ岡学園の批判に「生活教育」の成立を見出す点において異なるが，ジャーナリスト時代の上田の教育論をより高く評価する点では共通している。川口は雲雀ヶ岡学園の革新性を評価しつつも，「だが，彼の学校構想も，しょせん『新しき村』にすぎなかった」と付言し，中産階級のユートピアとして構想された点に限界を指摘した。中野は雲雀ヶ岡学園の閉校について，「こうして上田は，『ほんとうの子供』から出発する『素人の教育』をのりこえて，『現に時代の混濁せる社会的空気を呼吸して生きている児童』から出発する，生活教育へ，生活綴方教育へと向かっていくのである」と述べている。

先行研究の評価は，ジャーナリスト時代の上田の新教育批判を踏襲して成立している。しかし，子どもを理想化する空想的な教育から現実に根ざした教育へという展開には，上田の『教育日録』における子どもの描出が十分に位置づいていない。固有名による子どもの表記と，その具体的な活動の叙述は，上田が確かに一人ひとりの子どもと出会っていたことを示している。このことに着目するならば，社会化された存在として子どもを表象し，さらに子どもを語らなくなるジャーナリスト時代の彼は，むしろ子どもを基盤とする教育のユートピアを構想しうる言葉を失いつつあったとは言えないだろうか。

以下，第１節では，上田が雲雀ヶ岡学園において企図した教育を描出する。第２節では，雲雀ヶ岡学園における上田の教育を，『教育の世紀』誌における教育の模索と『教育日録』における実践の語りの連関と乖離に着目して検討する。第３節では，教育ジャーナリストとしての上田の闘いが，清算へと集約していく過程を明らかにする。

Ⅰ　「雲雀ヶ岡児童の村」の夢

A　教育のユートピアの構想

1　闘う個の主張

上田の教育の模索は新教育への傾倒から出発している。彼は高知の公立小学校に勤めていた1920年頃から，『闡明』（1920.6-1921.6），『土』（1921.7-1923.11），『地軸』（1924.9-1925.1）等の同人誌を主な媒体として，「個性」や「自己」といった新教育の語彙が頻繁に登場する論考を発表していた。彼の主張の特徴は，制度や因習と闘い，それらへの回収を拒絶する個を表現した点にある。『闡明』の最初の論考で，彼は「人生は愛と戦とによって仕遂げられるべき道程である」と述べ闘いを宣言した[5]。そして，視学や校長などの管理職とその「頑迷思想」を主要な敵として，「十何万の小学教師をして十何万の生活を仕とげしめよ」と教師の自由を高唱した[6]。その際彼は，皮肉や哄笑的なもの言いを多用するそれ自体が戦闘的な語り口を武器にしている。たとえば，出世道にのる教師は「軟体動物の如くなり，全く去勢されてしまった者」，設備を見てあるく視学は「教育死察者」，道徳の退廃を嘆くことは「精神的手淫」と表現された。

上田の論考には，新教育の中でも「創造主義」を提唱していた稲毛詛風からの深い影響を確認できる[7]。稲毛は『若き教育者の自覚と告白』（1912年）において「教育界の謀反者」を名乗り，教育界に不満を抱く教師たちを惹きつけていた[8]。しかし，稲毛の言う「自己」と，上田

の主張する個の差異は，とりわけ犯罪者への言及に明白である。稲毛は「罪人や悪人」は「人間として価値が少ない」とする。彼は「自己は唯一者なり」をテーゼとして「変り者」「独自な者」を志向しつつも，家族，民族，国家，世界における価値を要求することによって，「自己」の独自性を「優秀性」に限定していた[9]。それに対して上田は，「放蕩者，盗人，姦通者，私生児，惰者，病人，貧乏人，片輪者，煩悶者」を「第一の友」と呼び，「虐ぐる者にとっての異端者であり反逆者」を名乗って彼らに同一化している。「自分さえよかったら他人はどうでもよい生活」を「理想」とする上田は，生の無条件の肯定を求め，むしろ反価値的な存在に共感していた[10]。

上田は稲毛の「創造主義」の他にも，片上伸や山本鼎らの展開する芸術教育運動に期待を寄せている。上田は教育に芸術が導入される喜びを，「文芸教育，自由教育，自由画，自由詩，自由作文，童謡・童話，童話劇，童謡踊，これらま赤い血のような潮流が，ひからびた教育の全野におしよせた」と語った。彼は教育と芸術の共通点を「生活」に対する「愛」に見出し，芸術教育による教育の「愛の本路」への復活を求めていた[11]。

また上田は，同じ頃に同じ高知で教育改革を主張していた『極北』(1921.6-1922.9)の同人たちにも，「私には極北の同人諸君はまことに『新しい原始人』として尊く思われます」と賛同の意を表している[12]。後に上田と共に教育の世紀社の運動に参加する小砂丘忠義は，この『極北』を舞台として「校長論」「転任論」「講習会側面観」「優等生論」「視学論」等の論考を発表し，「教育界の革命」を提唱していた。

なお，上田が回収を拒む個を屹立させた背景には，強要された帰属によって差別された経験，あるいは帰属そのもののあいまいさが機能しているように思われる。彼は故郷の「人種的差別の馬鹿げた風習」について語った際に，自分が「犬神統」に，あるいは「混血児」として生れたために「人間様」と結婚できなかったことを記している[13]。

2　子どもの個の発見

上田は個の理想的な在り様を子どもに見出している。最初の契機をもたらしたのは，『闡明』の運動の圧迫である。転勤によって同人が離散した『闡明』は1921年6月で廃刊となり，益野小に転任した上田は同人誌『土』を発行した。挫折を経験した彼の論考は，戦闘に代わって，罪や孤独や矛盾を内包する内面の「混沌」を語っていた。さらに，個を妨げる外的な因習や制度を糾弾する代わりに，内的な空虚を吐露していた。ここにおいて上田は，「私の生活の最大の弱味を告白する。それは，心からねがったことのないという事だ。心の底から，やけきりの子供がじだんだふんでする様な，全力的なはげしいねがいが，私の生活にはない」と，羨望を込めて子どもを表象している[14]。

上田が明確に子どもを理想として語り，子どもを基盤とする闘いを構想するのは，1924年に小砂丘らと共に創刊した『地軸』誌上である。戦闘性を取り戻した彼は，「地軸」の言葉に込めた意味を「童心―童心。それこそは人類の地軸なのだ」と述べた。

「永久に人類の文明を救うのはコドモである。純真な童心なのだ。労働運動よりも水平運動よりも排米運動よりもコドモ運動だ。‥‥今の教師は児童に臣従奴隷して，成人乃至文明習俗の全面に挑戦してゆく人類の最も光栄ある戦士である。うれしいではないか。」[15]

子どもに大人にはない可能性を見出し礼賛する感覚は，「デリケートな感能に生きる子供達に，涸れはてた，荒びぬいた，僻みきった，乾固した感情を以て大人の吾々がはたらきかけるのが教育だと考えた時‥‥吾人は平気で仕事が出来よう筈がない」と述べていた小砂丘にも，ある程度共有されていたと言えよう[16]。

子どもを「純真な童心」と表現する上田の語り口は，『赤い鳥』に代表される当時の「童心主義」と重なっている。ただし上田が描く子どもは，純真というより反抗的である。論考「コドモの反逆」に登場する「僕たち」は，教師を徹底的に批判する。「勉強しろ」と言う教師を「人間の器械化」と評し，赤ペンを「人をふみつけたこと」と言い，流行にのった自由教育を「自由の強姦」と糾弾する[17]。1922年10月に生れた長女をめぐる随想記録『京子のために』では，京子が父である上田を拒絶する姿が称えられている。京子の「たくみのない純真な心」が賛美されるのは，上田の意向に反して彼の友人を見た京子が泣いた時である。(1923年4月25日)「子供ほどきれいな生活があろうか。かれにはなに一つかくさねばならぬこともなく，恐れねばならぬ権威もない」という感想は，京子が祖母には甘えても彼には甘えないことから導かれている。(1924年11月25日)[18]

上田は子どもを，反逆し拒絶する強靱な個として佇立していたといえよう。そして彼にとって，個は絶対だった。「社会革命」と「教育革命」の順序をめぐって王無久と論戦した際，上田は「教育革命」の先行を支持しつつも，「全を百人としたら九十九人まで革命を是認謳歌しても尚肯じないひとりがあるなら，それは尊敬顧慮すべきにんげんだと思う」と述べた。ここで彼が「自由の大胆な実行」と定義する「革命」も，「絶対個人主義の共

和」と呼び「個性の自由が豊富に味到享楽出来るような世界」と特徴付ける「僕のユートピア」も，個における生の享受のみを求めている[19]。彼の「コドモ運動」は，政治や社会の革命よりも，教育を通した生の革命を志向していた。

上田は小砂丘と共に，『地軸』を媒介として教育の世紀社に関与する。『地軸』に掲載された『教育の世紀』誌の推薦文は，「児童の村」の実験を「最上至高の教育信念」のもとで行われる教育として絶賛していた[20]。教育の世紀社同人の講演会も開催され，志垣が1924年1月と9月に，下中が1925年1月に高知を訪れている。志垣の招聘を受け，上田は1925年3月，小砂丘は同年11月に高知を離れた。1925年5月の『教育の世紀』に掲載された「雲雀岡児童の村」の設立予告に，上田は論考「生命の村に来て」を寄せ，「この自分の全体を，是認パスせしめてくれる天国」への期待を語っている[21]。

B　別荘地の学校

上田が着任した雲雀ヶ丘学園は，1925年9月に神奈川県茅ヶ崎の松林地区に設立された。「児童の村」を名乗らなかったのは，教育の世紀社が設立母体とならなかったことによる。雲雀ヶ岡学園を設立したのは，1921年10月から松林地区を「住宅兼別荘地」として開発していた秋元商事部であり，実際の経営は大野修二によって行われていた[22]。雲雀ヶ岡学園の「創立趣意」は，宅地開発の一貫としての学校創設を如実に示している。

「都会の生活が成熟せる大人に於てさえ，年毎に健康を破壊しつつあるというのは余りに明かな事実であります。‥‥然もかかる都会の只中に大量生産の器械教育を施し，一学級に七十名も八十名も収容して十把一束的の注入教育をしなければならぬ現在は，国家的悲惨事だと思います。‥‥以上の欠陥を併せ補い，子供の教育に悩みを持たれる人達の要求を満し，国家有為の人材を養成せんがため，地を世界的保健地帯にトし，何物にも，囚われざる自由生新な創造主義の新教育を実現せんが為に，本校を設立しました。」[23]

この「創立趣意」の特徴は，「子供」を媒介として「保健地帯」に住まうことと「新教育」が結びつけられている点にある。「俗悪な風潮，生命と不協和な騒音，無限の塵埃，降りしきる煤煙」と「都会」の欠陥を並べる文が郊外住宅地の広告を想起させると共に，「注入教育」の批判や「創造主義」の主張は新教育の口調を反復している。「田園ユートピア」の構成要素として，教育とその文化的なイメージを利用する宅地開発は，関東大震災後の流行だった。「学園都市」を構想した箱根土地の堤康次郎は，1924年に大泉学園と小平学園都市，翌年に国立大学町の開発を開始し，小原国芳は1925年4月に成城学園を郊外に移転していた[24]。雲雀ヶ岡学園は，学校教育が中産階級に移住を促す商品として成立する時期に，別荘地開発に動員される形で開設されたのである。

なお，上田の「土に即する自由人の生活」あるいは「田園土人の生活」の希求は，もう一つの「田園」の夢を示唆している。彼は「文明」への反感と「土」への憧れを抱きつつも，「田舎」には「頑固な伝統習俗が限なく生活の全野に見張りしている」と嫌悪の感情を示していた[25]。上田が「田舎」である故郷を不自由な場として認識していたことは，1925年3月の退職願に記された「教育ノ自由ナル研究ノタメ」という言葉にも現れている[26]。それに対して，郊外の新興住宅地である雲雀ヶ丘は，自然を備えつつも「田舎」の因習を欠く点で，「田園土人」の住まう場のイメージにふさわしい。また私立の雲雀ヶ岡学園は，転任や昇給を通した公的管理を免れている点で「自由」だった。

雲雀ヶ岡学園は，地元の子どもを松林小学校から譲り受け，玉突場を校舎として開校された。志垣寛が「雲雀岡には二，三十戸の住宅しかない」と報告したように，松林地区の開発は不振だった[27]。中野の研究によれば，別荘地の子と確定できるのは3名のみで，長期在学者の大半は半農半漁の地元住民の子だったとされる[28]。

Ⅱ　雲雀ヶ岡学園における教育の語り

A　『教育の世紀』の教育言説

「生命の村に来て」（1925年5月）に「念願たる素人の教育を爆発したい」と記して以降，上田は『教育の世紀』上で「素人の教育」あるいは「土人創造の教育」と呼ばれる自らの教育を模索した。ただし彼の論考は，雲雀ヶ岡学園の教育を具体的に論じるよりも，大胆な断言を特徴とする闘いの言葉で既存の教育や文化を批判するものであった。

初期の上田の議論は，高知時代の主張を反復しつつ，生の享受を目的とする教育を提示している。彼は「芸術教育の意義」（1925年7月）において，「生の実感内容」を自己の中に生起する「要求意欲の矛盾闘争」に求めた上で，次のように述べていた。

「斯の如き人生の眩惑すべき混沌を，佇立したり（懐疑派）逃避したり（厭世派）一部分を姑息的に圧迫したり（禁欲派）しないで，渦捲きながら行く處に，生きる興味と信念が湧く。‥‥この『混沌をゆかしむる力』―生命の根本活力を培育しようというのが，教育の本義で

ある。」[29]

上田はここでも芸術教育に可能性を求めている。彼は従来の教育が「実利的人生＝（右半身）＝物的生活＝営む生＝精進」に傾き，「唯美的人生＝（左半身）＝精神生活＝味う生＝享楽」を本位とする芸術を看過してきたことを批判していた。また，子どもはやはり礼賛されている。彼は「教育者は，子供のメーデーに，その行列の邪魔する大人を検束する巡査でありたい」と述べ，教師の仕事を子どもの擁護に求めていた。

しかし，「素人の教育」を追求する上田の論調には若干の変化も見られる。「野生の教育萌えよ」（1925年8月）では，「素人はしたい事は何でもやる」「素人は火である。感情である。本能である」と，欲望に忠実に生を謳歌する「素人」が表現されているが，ここには「文明」や「文化」の明白な否定が伴いはじめている。彼は「素人」を，「玄人」ではなく「文明人文化人」に対置し，「土にまみれた裸一貫人間」あるいは「未だ文化文明の加工乃至鉱金を受けないきぢの人間」として表現していた[30]。

さらに「生活批評としての土人創造の教育」（1925年11月）において，上田は「階級」の視点を導入する。彼は，有島武郎が自殺前に記した「独断者の会話」を引用し，有島の「ひとりのための教育」の「無方針」に共感を示しつつも，そこに「生活観照の教育の一破産」を指摘した。上田は教育の指針を求め，「土人創造の教育」と，過渡的な形態としての「階級観に立つ教育観」を，「生活批評のランプ」として選択している[31]。

上田は「素人」よりも「土人」を用いるようになり，その語に過度に多様な意味合いを込めていった。「生活批評としての土人創造の教育」での「土人」は，一方で「資本主義文明」を生きる「資本家」「労働者」に対置され，他方で「田舎人」や「土百姓」と共に「都会人」や「ブルジョア」に対置された。「東洋生活精神と教育」（1926年8月）では，「土人」と「金人」が対置され，「土人」「東洋的なもの」「土の文明」「東洋人」「日本」対「金人」「西洋的なもの」「金の文明」「西洋人」「米国」という対立項が構成される[32]。

「土人」をめぐる多様な議論の共通点は，「ブルジョア」や「金人」を，「文明」や「文化」を体現する敵として表象する点にあった。この過程において，子どもの生も無条件には礼賛されなくなっている。「土人創造の教育戦線」（1926年5月）では，「ブルジョアの子供」について激しい批判が展開されていた。

「言葉遣いはいいけれどもおきまりの味しかない。彼等には謙抑な心がない。自分に対しても他人に対しても表皮の優越で何もかも押し通そうとする。何に対しても苦痛の体験がなく我慢することができないから少しの事にでも泣く。そうして独立心がなく依頼的である。」[33]

なおこの論考は，上田の『教育の世紀』の論考では例外的に雲雀ヶ岡学園に関する叙述を含んでいる。ただし彼は，「学園一のブルジョアの子供」についての言及では，前の学校における特別待遇を指摘しているに過ぎず，子どもを直接の批判の対象とはしていない。

B　『教育日録』の日常世界

上田の雲雀ヶ岡学園における『教育日録』[34]には，個々の子どもの活動を中心に，全体の活動や教室での出来事，彼の感想や考察が記されている。興味深いことに，その叙述は彼の語りを特徴づける戦闘性を欠き，むしろ淡々とした文体で綴られている。

「十月十日　土　雨　△欠席（島崎桃吉）　△朝，平仮名の練習用紙を印刷すると皆が喜んで書く。十枚あまりも書いたのもある。　△気持ちよく勉強した。　△沢野さんも猿田さんもお母さんが来る。　△午後も五六人居残って帰らない。新倉君がすばらしい童謡を作ったのは愉快だった。　△山田礼子さんをスケッチする。　△石山初音さんが沢野静江さんとけんかをして泣いてかえる。」

この静かな語り口には，上田の子どもへのまなざしの在り様が現れている。第1の特徴は，子どもが名前や愛称などの固有名で表記されている点にある。中産階級に属する別荘地の子どもと，半農半漁の地元の子どもは区別されていない。子どもの様子の記録から両者を判別するのは困難であり，親の参観の記録を通して教育熱心な中産階級の子どもが特定できる程度である。例外は，「ブルジョアの子供としての甘やかされて手のつけようなく思いおごった生徒がある」と述べる1926年3月17日の叙述である。ここでは子どもの固有名が消え，「ブルジョアの子供」「東海道の子供」に置きかえられている。

第2の特徴は，学園での平凡でささやかな日常が記されている点である。上田は，「白井龍夫君と石山善蔵くん」が「立派な画をふたりとも描いて帰った」こと（10月27日），二桁の乗算の出来なかった「石黒扶志江さん」が「すっかり出来た」こと（11月10日）など学習の様子や，「山田礼子さん」について来た弟が隣席で画を描いていたこと（9月14日）などの小さな出来事を記録している。加えて，上田が求める学習の在り様も決して華やかではない。「朝の学習はみっしり出来た」（10月14日），「運動会見物が気になって学習がしんみりしない」（10月21日）といったように，彼は望ましい学習を「みっしり」「しんみり」という静かな充実を示唆する言葉で表

現している。

第3の特徴は，上田の感想や考察が，具体的な子どもの活動や出来事に即して記されている点にある。彼は活動や出来事に，感情を表現する素朴な言葉で感想を添えた。「新倉君」の「学習日記」に「文枝さんとけんかした」と書いてあるのに対して「かわいい」（9月24日），「須田君」が「はじめて画を描」いたのについて「うれしい」（10月8日），「初音さんとトシちゃんとアヤ子さん」が「野卑な流行歌」を歌っていた時には「暗い気持に一寸なった」（10月26日）と記している。また彼は，子どもの様子を受けて教育方法を考察した。その記述は，「何より読書力の貧弱なのに驚く。なんとかして読書力をもっと逞しくさせる工夫をしなければならぬ」（9月15日），「子供はやっぱり時間割を要求する様だ。どうしようかと思う」（9月18日）といった形をとっている。

上田が『教育の世紀』上で展開した教育論と，この『教育日録』の叙述の関係は両義的である。一方で，教師の仕事を子どもの擁護に求めることと『教育日録』における彼の受容的な在り方は重なり合い，生の受容と享受を目的とする「素人の教育」と子どもの日常生活へのまなざしは連続している。しかし他方で，『教育日録』に登場する固有名の子どもは，学習し表現し喧嘩する具体的な子どもであり，抽象化され理想化された「素人」でも，一面化され嫌悪された「ブルジョアの子供」でもない。また『教育日録』の叙述は，「素人」や「土人」のように文化を否定することではなく，充実した学習や表現を子どもたちに求めている。上田の『教育の世紀』の議論は，『教育日録』に表現された彼の実践の基盤を構成しながらも，逆説的に乖離し葛藤していた。

Ⅲ　教育のユートピアの挫折

A　雲雀ヶ岡学園の閉校

1927年の雲雀ヶ岡学園は，大野の住宅兼別荘地の開発の失敗を受け，経営破綻へと向かっていた。上田の『日記』[35]によれば，大野からの給料の支払いは滞りがちである。「タイムの流ればかりが目について仕事の歓びはちっとも見えない」（1月15日）といった記述が，彼の不安といらだちを伝えている。4月半ば過ぎには，大野の手がける松竹キネマ雲雀ヶ岡撮影所の手伝いが始まり，上田の多忙と焦燥に拍車をかけた。彼は教育への絶望を，「小学校の教師をいつまでやった処でものにはなるまい」（5月15日），「教育という仕事に対してもぼくはどちかと云うと自信を失った」（5月19日）と吐露している。さらに，上京の決心を語った5月23日には，雲雀ヶ岡学園での経験を「道草」とさえ表現している。10月13日に学校の電気が切られ，約1ヶ月後の11月14日に，上田は雲雀ヶ岡学園を辞して教育ジャーナリストとしての活動をスタートさせた。

上田の『日記』は，雲雀ヶ岡学園の挫折を別荘地開発の失敗による経済的な破綻として語っている。しかし，ジャーナリストとなった彼がメディアに発表した論考は，彼が中産階級を基盤とする別荘地の学校を見限ったかのような印象を与えている。彼が1928年に教育の世紀社同人の下中にあてて書いた公開状では，下中の教育離れや金儲けなどと共に，「児童の村」の実験が皮肉たっぷりに批判されていた。

「あなたは嘗て，あなたの同志とともにあなたの教育理想の実現のために，池袋児童の村小学校を建てましたね。そうしてそこに実現された教育は，あなたの所謂万人労働の教育でも何でもなかったではありませんか。‥‥とに角僕もそういう主張に共鳴して盛んに教育の革新を考えたものでしたが，よくよく考えて見ればああいう教育は，成城でも明星でも有産階級の子弟のために，余分に骨を折ってやる位なものですね。」[36]

上田の口振りは，「有産階級」を対象とする私立学校の意義そのものを懐疑している。また，下中らの教育革新の企図に参加してしまった自らを皮肉っているようでもある。このような新教育批判を上田は反復した。『教育戦線』（1930年）では，「純真無垢な童心の美的生活ばかり賛美」する「児童中心の教育」の「児童」は「現世には存在しない処の仮空的児童にすぎなかった」と述べている[37]。『大地に立つ教育』（1938年）では，「児童の村」を含む新教育運動を，「いずれにしても都市的教育理論であり，文化人の盆栽学園であり，文化住宅式の土いじり程度のものであった」と批判していた[38]。

しかし同じ『大地に立つ教育』で，彼は雲雀ヶ岡学園時代の自らの詩「早春賦」を引用し，「こんな歌を子供とともに歌いながら，教育実践の難関に悶えたのは，もう十年一昔前である。だが，かえりみて真に生活と四つに組んだことは，やはり教師生活のほかには，見出されなかった」とも述べた[39]。「早春賦」に登場する「トミちゃん」「静江さん」「柳ちゃん」「善ちゃん」の固有名は，新教育批判の中で小さな不響和音を奏でている。

B　子どもの喪失と清算の語り

上田は1929年に，小砂丘や「池袋児童の村」の教師たちと雑誌『綴方生活』を創刊した。『綴方生活』の論考において，上田は「階級」の視点を全面に押し出した議論を展開している。「綴り方教育の新拓野」（1929年12月）

では，「今の世の中」という作文が「驚異的な傑作」として紹介され，その理由が「社会主義的傾向」「理知的傾向」「具象的現実的傾向」「客観的傾向」の4点で提示されていた。しかしここで興味深いのは，子どもを通して社会を変革するという「コドモ運動」の論理が継承されている点である。彼にとって，子どもが「心の底から言いたいこと」，すなわち子どもの「生の第一義欲の表現」は，何らかの社会批評であり，その表現を抑制するのが大人の「芸術至上主義」だった[40]。

「コドモ運動」の論理の反復は，同年12月26日から28日に開催された「新綴方研究講習会」の講演により明確である。上田は，子どもは「大人の縮小」でなくていいが，大人は「子どもの生活の拡大であって差し支えない」と述べていた。

「真の子供の綴り方には，大人にとって一大脅威であるような子供のぶっきらぼうな生活革命の閃き，社会観が，厳然として確在するものでなければなりません。教師はそれを発見保育してゆくべきで決して現在のように子供の真の表現をごまかして大人のようにへしまげて考えるべきではありません。」[41]

上田にとって，大人は批判の対象，子どもは可能性であり続けていた。ただし，彼の子どもの表象は，かつての子ども礼賛とは差異をも含んでいる。「素人」としての子どもが制度からの逸脱と生々しい個の在り様において賛美されていたのに対して，ここに描き出されている子どもは社会を理知的に批判し，そこに可能性を託されている。また彼は，生の享受を目指す教育革命よりも，社会的経済的な革命を志向しはじめていた。

子どもの生に「野性」を見出し希望を託し続けたのは，「逞しき原始子ども」を語った小砂丘だった。彼は綴方の検討において，風呂屋で他村のおじさんとやりあう「がんばり性」「やんちゃ性」や，「メメズだぞー」と「バアチャ」をたまげさせる「野性」「真実性」を，残したい「原始性」として提示している。彼は子どもの「原始性」を，「田舎」や「村」の子どもの綴方に求めていった[42]。

一方上田は，1930年7月の「童心至上主義の崩壊性－綴り方教育に於ける中間意識の清算－」において，子どもの可能性を否定した。彼は「童心至上主義」を，子どもに救いを求める「大人本位」と，大人と子どもの差異の過大視において批判し，「大人と子供との間の，生活差や，対立関係」は「より大きな階級的対立に比べては，取るに足らざる問題」だと述べている[43]。この論考のタイトルは，彼の語りの行方を正確に示していた。彼は子どもをあまり語らなくなり，「清算」と呼ばれる過去の否定へと向かう。

闘いへの志向の強い上田は，「階級」の視点を媒介として，戦闘的な言葉で清算を叫ぶ「マルクス主義」に傾倒した。彼は1930年7月に刊行した『教育戦線』の序文で，自らの「プチブル的観念形態」への「教育戦線」を宣言し，同年8月にプロレタリア教育革命を掲げる新興教育研究所の創設に参加している[44]。1931年4月には，「マルクス主義教育理論」を勉強する雑誌として『観念工場』を創刊した[45]。上田は創刊号において，「我々の現前の任務」を，「過去及び現在の一般教育理論を徹底的に検討し解剖して，階級的立場から批判し，一般教育理論の遺産整理を遂行すること」に求めている[46]。

皮肉なことに，新興教育研究所の運動への協力を企図し，所の承諾を得て創刊された『観念工場』は，上田と新興教育運動の亀裂を露にした。直接の原因となったのは，上田が創刊の辞に記した「単なる口吻マルクス主義」「何等教育理論に食い入らない翻訳マルクス主義」という表現である。新興教育研究所は上田に「新興教育への対立」を見出し，「裏切物（ママ）」「社会民主々義」といった攻撃の言葉を投げつけた[47]。川口幸宏が指摘しているように，おそらく上田に「対立意識」はなかった[48]。しかし彼が，新興教育運動の方途にある種の違和感を覚えていたのも事実だろう。彼は「デモの練習やビラまきの稽古や労働歌の演習でなくても，平凡な課業の中に，朝礼に草むしりに遠足に，行事に，そうしたありきたりの機会に吾々は教育の真理性を見出さねばならない」と述べている[49]。この子どものありふれた日常生活への着目は，具体的な出来事の中に教育の可能性を探ろうとした上田の『教育日録』のまなざしを，かすかながらも確かに感じさせる。

その後上田は，闘う「マルクス主義」に惹かれた時と同じように，革新を語る国民学校体制に可能性を見出している。媒介となったのは，彼の「土人創造の教育」の主張に含まれていた教育の欧米化への批判だった。彼は『国民学校教師論』（1941年）において，日本の教育の問題を「欧米教育学説の植民地」であるという点に指摘し，国民学校体制を「模倣教育を根本的に改造して日本教育の創造体系を樹立しようとする歴史的な試み」として評価している[50]。彼の「学校は児童の楽園であるとともに教師の楽園である」という言葉は，その目的が国家よりも教育のユートピアの構築にあったことを示唆している。しかし，ひたすら既存の教育の制度や理論を批判する彼の語りは，「楽園」の姿を描けないまま，純粋な「日本教育」の実現を求めるナショナリズムに回収されていた。

おわりに

『教育日録』における上田のまなざしは，固有名の子どもの日常世界へと向かい，具体的な経験の中に教育を模索していた。このまなざしの在り方は，野村芳兵衛，平田のぶ，峰地光重ら「池袋児童の村」の教師の実践記録の叙述と共通している。『教育の世紀』に掲載された彼らの論考は，しばしば「僕」や「私」という一人称を主語とする語りにおいて，固有名の子どもを登場させ，教室での具体的な出来事を描出していた。しかし，公的なメディアに発表された野村の実践記録とその考察が，日常的な出来事を物語化して意味を付与し，教育の経験として分節化していたのに対して，上田の雲雀ヶ岡学園における経験は私的な『教育日録』に断片的に記述されるに留まっている[51]。しかもその経験は，後の彼自身による新教育と童心主義の批判によって否定されることになる。

この過程には，上田の子どもの表象と教育のユートピアの夢が幾重にも埋め込まれている。彼が高知時代に描き出し，雲雀ヶ岡学園において企図した教育改革は，個々の生の充実それ自体を目的とするアナーキーな生の革命であった。「素人の教育」と名づけられたその夢は，因習や制度への回収を拒む個と，個の理想を体現する子どもを基盤としていた。そして雲雀ヶ岡という別荘地の孕む「田園」の理想は，剝き出しの「素人」であることが可能だという幻想，子どもが「素人」であるという幻想を支えていた。

「素人」としての子どもの表象は，雲雀ヶ岡学園において両義的に機能している。一方で，個々の子どもの生の無条件の礼賛は，上田の『教育日録』における子どもの日常世界への受容的なまなざしを準備している。その叙述は，日々のありきたりでささやかな出来事を記録すると共に，具体的な出来事に応える形で教育を模索する上田を表現していた。しかし他方で，「素人」として表現された剝き出しの個の礼賛は，「文明」あるいは「文化」を否定する傾向を強めつつ，個の生の無条件の肯定を掘り崩している。彼が『教育の世紀』に発表した論考は，「素人」や「土人」の理想を「金人」や「ブルジョア」との対置によって表現し，子どもを含む個々人の生を「階級」の視点から批判していた。『教育日録』の静かな語りと，『教育の世紀』上の闘いの言説との乖離は埋まらないまま，彼は経営が成り立たなくなった雲雀ヶ岡学園を辞している。

ジャーナリストとなった上田が展開した「階級」を軸とする教育批評は，雲雀ヶ岡学園の実験を自ら否定していた。彼はかつてと同様に，子どもを可能性として表現していたが，その子どもは「素人」ではなく社会を批判する存在であり，生の革命よりも経済や社会の革命を志向していた。その後彼は，次第に子どもを語らなくなる。子どもを喪失した彼の語りは，既存の教育の制度や理論を批判する清算へと集約しつつ，マルクス主義理論や国民教育体制の中に教育改革の可能性を模索していた。しかし彼の教育のユートピアは，声高に叫ばれた理想としてではなく，『教育日録』に描出されたありふれた日常生活の中に教育の可能性を探る挑戦として，現在に残像を残している。

（指導教官　佐藤学教授）

注

1）雲雀ヶ岡学園は，他に「雲雀岡児童の村」「雲雀ヶ岡小学校」等の名称で呼ばれている。本稿では，上田の使用頻度の高い「雲雀ヶ岡学園」を用いる。

2）上田の『雲雀ヶ岡学園教育日録』は，1925年９月から1926年３月，1927年１月から10月のものがノートで３冊分残されている。1927年のものには里見幸子の記録（４月－７月）も含まれている。以下，『教育日録』と略記。（手書き，上田耕一郎氏所蔵）

3）川口幸宏「上田庄三郎と雲雀ヶ岡小学校」中野光・高野源治・川口幸宏『児童の村小学校』黎明書房，1980，pp.221-285

4）中野新之祐「茅ヶ崎・雲雀ヶ岡［児童の村］小学校」中内敏夫・橋本紀子・田嶋一編著『教育の世紀社の総合的研究』一光社，1984，pp.492-542

5）上田超風「創生」『闡明』２号，1920.7

6）上田超風原「自我創造の一路へ驀らに」『闡明』６号，1920.12

7）『闡明』２号（1920.7）には稲毛の講演会が予告されている。また上田は，『教育実験界』39巻10号（1918.10）に「創造教育の先決問題」と題した論考を発表している。

8）稲毛詛風『若き教育者の自覚と告白』内外教育評論，1912

9）稲毛詛風「創造教育論」『八大教育主張』大日本学術協会，1922，pp.21-27

10）上田超風原「個性の圭角に生きたい」『闡明』７号，1921.1

11）上田超風林「芸術的精神の教育的氾濫」『闡明』８号，1921.6

12）「談話室」『極北』３号，1921.9，p.50

13）上田超風「貧者の教育断想」『教育の世紀』4-11，1926，p.110

「犬神筋はもとはある種の動物霊によって神の意志を聞く祈禱師のごときものだったが，後にそれが恐れられるようになったのだともいわれている」（坂本正夫「犬神」『高知県百科事典』高知新聞社，1976，pp.52-53）

14) 上田超風「混沌を行く（二）」『土』２号，1921.9
15) 上田超風「『地軸』は出発する」『地軸』創刊号，1924.9，pp.7-11
16) 小砂丘忠義「主張　二」『極北』第２号，1921.7，p.1
17) 上庄漫筆「コドモの反逆」『地軸』第２号，1924.10，pp.23-25，同第３号，1924.11，pp.18-20
18)『京子のために』（手書き，上田耕一郎氏所蔵）
19) 上田超風「教育戦線－３－」『地軸』２巻１号，pp.18-25
20) 地軸社「教育世紀紹介」『地軸』３号，1924.11，pp.42-43
21) 上田庄三郎「生命の村に来て」『教育の世紀』3-5，1925.5，pp.116-117
22)『茅ヶ崎市史４　通史編』茅ヶ崎市，1981，pp.626-627
23)「創立趣意」（川口幸宏「上田庄三郎と雲雀ヶ岡小学校」上掲書，pp.224-225）
24) 松井晴子「箱根土地の大泉・小平・国立の郊外住宅地開発」山口廣編『郊外住宅地の系譜―東京の田園ユートピア―』鹿島出版会，1987，pp.221-236，松井憲一「成城・玉川学園住宅地」同書，pp.237-260
25) 上田庄三郎「混沌をゆく」『教育の世紀』3-10，1925.10，pp.92-102
26) 上田の退職願による（上田延右氏所蔵）
27) 志垣寛「雲雀岡児童の村のこと」『教育の世紀』3-5，1925.5，pp.114-116
28) 中野新之祐「茅ヶ崎・雲雀ヶ岡［児童の村］小学校」上掲，pp.516-518
29) 上田庄三郎「芸術教育の意義」『教育の世紀』3-7，1925.7，pp.42-49
30) 上田庄三郎「野生の教育萌えよ」『教育の世紀』3-8，1925.8，pp.96-103
31) 上田庄三郎「生活批評としての土人創造の教育」『教育の世紀』3-11，1925.11，pp.20-36
32) 上田庄三郎「東洋生活精神と教育」『教育の世紀』4-8，1926.8，pp.93-101
33) 上田庄三郎「土人創造の教育戦線」『教育の世紀』4-5，1926.5，pp.20-30
34) 以下の引用は，特に記載がない限り1925年の『教育日録』による。
35)『日記』（1927年，手書き，上田耕一郎氏所蔵）
36) 上田庄三郎「下中弥三郎氏に」『教育週報』153号，1928.4.21，p.6
37) 上田庄三郎『教育戦線－教員組合の結成へ』自由社，1930（『上田庄三郎著作集２　教育のための戦』国土社，1977，p.233）
38) 上田庄三郎『大地に立つ教育』啓文社，1938（『上田庄三郎著作集１　大地に立つ教育』国土社，1978，p.49）
39) 同上，p.26
40) 上田庄三郎「綴り方教育の新拓野」『綴方生活』1-3，1929.12，pp.6-13
41) 上田庄三郎「どこに問題があるか」『綴方生活』2-4，1930.3，pp.210-216
42) 小砂丘忠義「生活指導と綴方指導」『綴方生活』5-8，1933.8，pp.4-9
43) 上田庄三郎「童心至上主義の崩壊性」『綴方生活』2-7，1930.7，pp.20-28
44) 上田庄三郎『教育戦線　―教員組合の結成へ』（上掲書，p.187）
45)（上田）「小さい便り」『観念工場』創刊号，1931.4，pp.74-75
46) 上田庄三郎「教育理論の遺産整理」『観念工場』創刊号，1931.4，pp.70-75
47) 上田庄三郎「具体的事情を読者に」『観念工場』1-4，1931.7，pp.85-86
48) 川口幸宏「上田庄三郎の教育運動と教育思想」『教育運動史研究』14号，1972，pp.33-43
49)（上田）「編集後記」『観念工場』2-5，1932.5，p.30
50) 上田庄三郎『国民学校教師論』啓文社，1941，pp.77-78
51) 野村の教育の語り口については，浅井幸子「野村芳兵衛の一人称の語りとその変容―実践記録の記述を中心に―」（『教育学研究』66-2，1998，pp.21-30）を参照されたい。

謝辞　本論文を執筆するにあたり，上田耕一郎氏，上田延右氏，川口幸宏氏，中野新之祐氏，西村政英氏にご助力を頂きました。感謝いたします。